

千葉市史編さん担当

〒260-0856
千葉市中央区亥鼻1-6-1
千葉市立郷土博物館
TEL 043-222-8231



編さん便り

Chiba-shishi News Letter NO.12 2014.3

新聞にみる
千葉のむかし

新しい時代・新しい産業

千葉と養蚕

編さん便りNo.10では、明治期の新聞から「禁酒運動」関係の記事をご紹介しました。本号も、「ちょっと気になる」記事をピックアップしてご紹介いたします。今回ご紹介する記事のキーワードは、「養蚕」です。現在、千葉県内で養蚕を営む農家は、ほんのわずか（平成22年は11戸、桑園面積6ha弱）です。全国でも平成16年段階で1,850戸にまで減ってしまいましたが、かつては日本の近代化を支える重要な産業でした。

弥生時代には日本に伝わったとされる養蚕技術は、江戸時代に入り徐々に国内の生産量を増やしました。しかし養蚕はあくまで副業で、いわゆる特産地を除いては、一般の農民はそれほど熱心に取り組んでいたわけではありませんでした。しかし明治維新以降、生糸は日本の主要な輸出品のひとつとなり、その原料生産として、養蚕はまたたく間に各地へ普及していきました。養蚕といえば信州・上州や武州といったイメージが強いと思いますが、千葉県でも明治13年（1880）千葉県令として赴任した船越衛（88年まで在任）が、養豚・養鶏・養蚕を奨励、この船越県政において、各地に養蚕技術訓練施設として「養蚕伝習所」が設立され、桑苗の貸し付けや、県費による群馬や埼玉などの養蚕先進地への伝習生の派遣などが行われました。

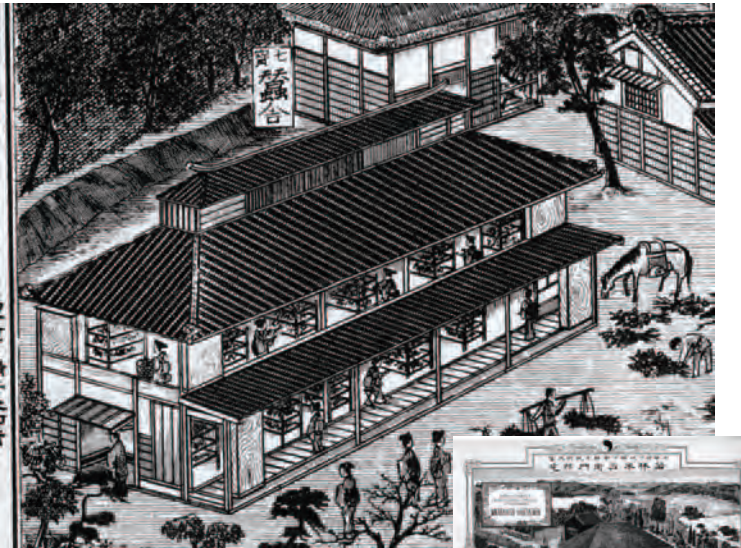
船越が県令になった直後の新聞記事には、千葉周辺の養蚕についての記事はあまり見られませんが、2年後の15年5月22日付『総房共立新聞』の広告欄に、千葉旧試験場高橋弥五右衛門が広告を出しています（旧試験場は県立勸業試験場カ、また高橋弥五右衛門は高浦弥五左衛門の誤植カ）。高橋

は「各種」蚕種を飼育し、希望者に販売していたことがわかります。場合によっては糸に加工したものも販売したようです。一般ではまだ出回っていない品種も飼育していたのでしょうか、「養方略書」を「望之仁」へは添えるという文言から、技術伝授も兼ねていたのかもしれない。

【千葉市域の養蚕家】

船越県政の終わりが見えてきた明治21年（1888）5月23日付の『東海新報』には、「実況巡覧」として千葉県農商課長が「東條巡回教師」として千葉郡大宮村の若林氏の養蚕所を巡覧したとあります。「巡回教師」については、後にも触れますが、各地をまわって技術指導をしたのでしょう。

若林氏は、明治31年刊行の『千葉県蚕業家名誉鑑』にも掲載された千城村大宮の豪農です。若林家の全体像は、「千葉県博覧図」（国書刊行会）に掲載されており、『千葉市史 通史編 近世近代』にもその写真が既に掲載されているので割愛して、ここではそのうちの一部分（屋敷地の左端部分）を拡大してみましょう。↙



『千葉県博覧図』（国書刊行会、1986年）
「若林半左衛門邸宅」より



ちば歴史散策こぼれ話

第7回 大地震、次いで襲う大風雨、そのとき人々は…

安政2年（1855）10月2日に発生した安政の大地震は有名ですが、安政の大水害をご存じの方は少ないと思います。安政3年8月25日に大型台風が来襲し、東海道駿河付近から水戸辺りまで大きな被害をもたらしました。今回はこの台風災害について紹介したいと思います。

この時の台風は、駿河湾辺りに上陸し関東地方を縦断、東北方面に抜けたと思われます。8月23日から雨が降り始め、25日には雷と猛烈な風雨を伴う大嵐になりました。詳細な被害状況は不明ですが、江戸では死傷者「十万余人」との記録があります。大風により家屋や土蔵など倒壊・半壊、浦安から行徳では高潮により堤防が決壊し、低地で床上4尺（約132cm）以上の浸水、溺死者237人にのぼりました。また、この地域では古くから塩業が盛んでしたが、塩田はもちろん、塩業に必要な道具類も高潮によって流失しました。千葉市域では断片的な被害状況しか分っていま

せん。武石村（幕領、現花見川区武石町）が8月29日に幕府代官に出した御手当金下賜願では、家屋の全壊が5軒、半壊が12軒（家数は73軒）、早稲・晩稲・薩摩芋などは塩害で収穫できないと述べられています。この台風後、物価は高騰し、家屋の修復のための材木代・職人手間賃・運搬費も上昇しました。また季節はずれの新芽がでたり海棠が咲いたり、異常気象をもたらしました。

武石村では、救済金として全壊家屋に1軒当たり金2分、半壊に金1分が与えられました。同じ幕領でも、松戸宿（現松戸市）では全壊1軒当たり金3分、半壊に金2分が与えられ、藤原新田（現船橋市）では名主が米や銭を施しています。年貢減免や種粃拝借などを願い出た地域もあり、救済は地域やその支配関係によって差異がありました。

先の東日本大震災のような大地震への備えはもちろん、毎年襲来する台風への備えも重要ではないでしょうか。

平成26年度 千葉市史主催 講座のご案内

1 市史研究講座「千葉市の歴史を学ぶ」

定員200名。会場；千葉市民会館小ホール。

対象；千葉市に在住・在勤・在学の方。

全2回（1回2講演、各講演80分）。

講演1；13:30～14:50、講演2；15:10～16:30

日程及び各回のテーマ（全て現状では仮題）は以下の通り。

第1回 9/6 (土)	1	弥生時代の千葉市 蜂屋 孝之先生（千葉県教育庁文化財課）
	2	下総千葉氏と肥前千葉氏 井上 聡 先生（東大史料編纂所助教）
第2回 9/27 (土)	1	12世紀における千葉氏 野口 実 先生 （京都女子大学宗教・文化研究所教授）
	2	新聞記事にみる千葉町の人々 小林 啓祐先生（千葉市史編集委員）

*市政だよりにて募集します。

2 古文書講座

初級古文書講座

古文書解読初心者対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。くずし字の基礎を学ぶ講義形式の講座。全6回。講師は小代渉先生（柏書房編集部）。日程は5/3・5/31・6/7・7/5・8/2・8/30（何れも土曜日）。同じ内容で午前・午後の部の2回に分けて開催。午前は10:00～12:00、午後は13:30～15:30。
*市政だより（4月1日号）にて募集します。

中級古文書講座

古文書に慣れ、ある程度読める方を対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。全6回。講師は後藤雅知先生（立教大学文学部教授、千葉市史編集委員）。日程は秋頃を予定。
*日程は市政だより・郷土博物館HP等でお知らせいたします。古文書講座初級（各部）・中級とも定員は40名、会場は千葉市立郷土博物館講座室です。

どの講座も往復葉書・電子申請でのお申し込みです。

住所・氏名（ふりがな）・年齢・性別・電話番号を明記のうえお申し込みください（葉書の場合、一枚につき一人の応募）。

電子申請の方法を含め、その他詳細は市政だより・千葉市立郷土博物館HPにてご確認ください。

http://www.city.chiba.jp/edl/kyodo/kyodo_top.html

※申込み多数の場合、抽選となります。

㌵「七寶　蚕舎」と書かれた二階屋が描かれています。屋内外に女性が数名描かれていますが、屋内の女性はなにやら棚に向かって何かを差し出している様子。おそらく蚕に桑の葉を与えているのでしょう。若林半左衛門は、弘化2年生まれ、江戸で絵画の勉強をしていましたが、郷里に戻り農業を継ぎました。以来、農業改良に心を配り、特に蚕糸業先進地を視察したのち、明治2年には養蚕に着手、11年からは製糸業も始めました。当時、周辺地域には養蚕業を営む者もあまりいないなか、長野から桑苗や蚕具などを購入し、地元の有志にそれらを貸与・付与し、飼育法や桑の種類・蚕種については村内で一定の方針を設け、技術指導も行いました（戸隠から購入した蚕籠の材料である篠竹と似た篠竹を養老川上流にて採取、五井町の職人を雇ってこの籠を模造させ、神奈川や八王子方面に「五井籠」として販売しました）。先の蚕舎でも女性が多く働いている姿がみられましたが、当初より農家の副業として村内の婦女子に技術を学ばせており、製糸業開始以降は「農家ノ婦女子ニシテ空手坐食スルモノナキニ到リ」といわれるほど、村への利益還元を行っていたようです。こうした業績により、若林は「県下第一流ノ蚕業家」としての名声を得、正・副戸長を歴任、県議や千葉・市原第一蚕業組合長ほか、様々な公務につきました。明治23年には、盛城会という実業団体を組織、肥料の共同購入をおこなうなど、周辺地域の公益のために尽力しました（前掲『名誉鑑』）。同書には、製糸工場の規模も記されています。なかには現千葉市域にあった製糸工場もみることができます（下記）。

	持主	釜数	工女（人）	
野　田	三枝八十郎	50	40	機械
園　生	石橋善三郎	50	（未詳）	機械
千葉町	柴崎政吉	20	20	座繰 ＊繭糸合資会社
大　宮	林平右衛門＊	15	15	座繰
千葉町	渡辺定次郎	（未詳）	（未詳）	座繰
浜　野	藤巻大三郎	（未詳）	（未詳）	座繰

＊持主は林平右衛門であるが、若林の製糸場か。
＊繭糸合資会社は『千葉繁昌記』によれば吾妻町蓮池にあった有限責任合資会社。明治27年設立、社長柴崎政吉、業務担当員は国松喜惣治・鈴木利右衛門・鈴木利兵衛などそうそうたる顔ぶれである。

明治24年3月21日付『東海新報』には、養蚕事業について若林半左衛門が県知事へ出した意見書が掲載されています。このなかで、若林は千葉県が他府県より招聘している養蚕教師の質について訴え、またイタリアの養蚕技術を高く評価、これを学ぶため県費で数名をイタリアへ派遣することを提案しています。実現が難しいことは、若林本人もわかっていたと思いますが、この文章からも彼の熱意を感じることができます。

【養蚕伝習所などでの技術伝習】

次に、若林が問題とし、また彼自身もきっと村内の有

志者に行ったであろう「技術伝授」について考えてみましょう。まず船越県政のくだりでも出た「養蚕伝習所」についてです。

明治21年に県内5か所に私設伝習所が設置されたのが県内での養蚕伝習所の始めです（県より補助金あり。大正11年、千葉県内務部発行『千葉縣ノ蚕絲業』より）。同年5月31日付の『東海新報』に、「佐伯・佐々木の両属」が千葉信之館と鈴木氏の養蚕伝習所にて蚕の解剖・諸病の原因そのほか諸術を行い、それを観覧させる予定との記事が載っています。鈴木氏は千葉町の鈴木利兵衛氏のことと、桑苗数十万本を県内の養蚕業者へ貸し付けたり、養蚕伝習所を千葉町に設立する資金を出したりと、養蚕の普及に尽力したとされる人物です（明治21年1月6日付『東海新報』）。この鈴木氏の養蚕伝習所へは、千葉市原郡長も務めた佐藤幸則氏から寄附金が贈られ、殖産興業のために養蚕の技術向上が強く求められていたことがわかります（明治21年6月9日付『東海新報』）。

講演会は6月2日に開催され、3日にはその様子が記事になりました。そのなかで、参観者として県の農商課長や千葉・市原郡長などのに加えて「師範学校男女生徒数十名」(そのほか有志者数名)も書き上げられており、なかなかの盛況ぶりだったようです。

ほかにも千城村大宮区の伝習所（明治26年6月1日付『東海新報』）などが、記事により確認できます。

伝習所のほかにも「養蚕演説会」（明治24年10月17日付『東海新報』に高津戸での演説会の記事。聴衆は200余名）などが各地で行われるなど、様々な形で養蚕技術が伝えられていたようです。

次に、技術指導にあたった「教師」について考えてみましょう。鈴木氏の養蚕伝習所で講演を行ったのは、佐伯・佐々木両「属」、彼らは千葉県の役人と考えられます。「養蚕教師」が巡回視察を行う記事もいくつか見受けられます（先の「実況巡覧」で登場した東條巡回教師もその一人カ）。千葉県が養蚕教師の設置規定を設け、経費を計上していくのは明治30年以降のようですが（前掲『千葉縣ノ蚕絲業』）、郡書記と同道にて管下の養蚕事業を巡回視察していることから、彼らも基本的には千葉県の役人だったのではないのでしょうか。巡回では、若林家での事例のように、各地域で産出量の多い家を順次訪問するという方法が採られていたようです（もっと多くの養蚕家が教師に教えを請えるよう取りはからえないものかとの投書あり〈明治26年6月6日付『東海新報』〉）。そのほか、自身も養蚕や製糸場を営む人物が「教師」となることもあったようです。右頁上にあげた記事は、明治24年6月25日付『東海新報』のものです。

ここでは、千葉町道場で養蚕を行い、また製糸場をも営む堀弘記氏について「石橋養蚕所」の教師であり、

○堀養蚕の景況　千葉町道場の堀弘記氏は石橋養蚕所の教諭として屈勉せるのみならず三里以内の養蚕家十三軒の巡回教師となり東奔西走夜の目にも睡を眠れざる程の多忙の身に拘はらず自宅にも蚕室を設け又製糸場をも設立せるは能くも斯くまで手の届くものかなど何人も否を巻ひて賞嘆せる所なるが昨年は同養蚕へ石田前縣知事が臨場し本年は藤田知事も臨場して御く飼育の實況を視察されたり同氏飼育の手際は今更ら稱揚するまでもなく養蚕家は夙に知悉せるものなく本年同養蚕室より本縣及び他府縣の注文に応じて送付せし蚕繭額は二百餘枚にも達し就中山口縣の如きは百枚の注文ありし程なり又夏繭額をも製造せしが本年は桑葉に餘裕の餘剰を生ぜしより縣下各郡とも夏繭を飼育するもの多く同氏の手許のみにても既に

『東海新報』明治24年6月25日付

また三里（およそ12km）以内の養蚕家13軒の「巡回教師」をしていると報じられています。この石橋養蚕所は、『名誉鑑』で製糸工場が書き上げられていた石橋善三郎氏の養蚕所です（養蚕所と同じ場所に製糸場を設置〈6月25日付『東海新報』〉）。その蚕室は総坪数66坪、1,000枚の蓐座を入れる器具はすべて新品で、堀の発明した貯桑器を使用し、毎晩飼育業務が終わったあと、堀と助教の日暮平治郎・山本トヨが飼育上の講義を行い、毎回数十名の傍聴があったとされています（明治24年5月12日付『東海新報』）。堀氏の詳細は不明ですが、県知事の視察があったり、県内外からの蚕種の注文が相当量あることなどから、養蚕技術の高さが推測できます。

【女子師範の養蚕実習】

明治43年4月21日付『東海新聞』に、右のような記事が載っています。

鈴木氏の養蚕伝習所での講演会にも、師範学校の生徒男女数十名が参加していました。ここでは目的を「養蚕思想」の一端を会得するため、と記しています。師範学校の生徒が技術を習得すれば、結果的に教師となったのちにその技術が各地へ伝えられることになりますから、そうしたねらいもあったのかもしれません。明治10年設置の勸業試験場では、木製の製糸器械を設置、教師一人を置いて県下の女子を集め伝習を始めたとされています（『千葉県の歴史　通史編　近代1』）。先の製糸工場の表に記載されて

○女子師範校の養蚕実習
設立を師範学校にては四年生徒一般に養蚕思想の一掃を會得せしむる爲め養蚕所に於て毎日に之を飼育せし來りたるが本年も亦本月末に三年及び講習生八十餘名をして右飼育を爲しし由

『東海新聞』

明治3年4月21日付

いたのは工女ですし、若林の例を考えてもやはり製糸や養蚕には「女子」の手が必要不可欠だったのでしょうか。

【養蚕が千葉町周辺に与えた影響】

○具結果　千葉郡都村加曾利にては近年農事の閑た製茶と養蚕とを熱心する者多くして彼の習ふよりは馴れるの候の如く追々經驗を重ね實業に通じ且本年は季候も適せし故にや頗る其結果を得又家作も宜しく尙稻作も好き模權ふ付き毎年一名乃至二名位伊勢参宮に出懸しも今年は金鰯の豊かなるより十五六名の若者達が伊勢参宮に出掛けしといふ賑に目出度う勝しといふべし

『東海新報』明治22年6月18日付（左）　同年7月6日（右）

次に養蚕業の景気がわかる記事を見てみましょう。

左上の記事では、製茶・養蚕のため農家が全体的に多忙になり、結果千葉町においては米穀・薪炭が払底していることが報じられています。背景には、もちろん養蚕から得られる収入が大きいことがあるでしょう。右の記事では、その恩恵にあずかった加曾利村の人々が、毎年一、二名のところ十五、六名もが伊勢参宮へ出かけられたと報じられています。こうした記事は、養蚕に対する人々の期待を更に高めることになったことでしょう。

今回は養蚕・製糸について明治10～20年代を中心に、細かなトピックスを集めるに留まりました。千葉市域の大半を含む千葉郡の繭生産量は、県内でもかなり低い（明治24年の記事では千葉近傍で養蚕家が少ないため桑の葉は価格下落と報じられている）のですが、長野県上田の養蚕改良公業会社の出張所や高等蚕業講習所・蚕種検査所が千葉町に開設されたり、蚕業組合や技術伝習についてなど「千葉」と養蚕・製糸との関係を示す記事はまだまだあります。随時ご紹介していければと思います。本年度刊行の『千葉いまむかし』27号でも「明治千葉町の人々と自転車」と題し、明治の新聞記事を紹介しています。機会があれば、ご覧になってみてください。

